慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「Feiqe no monogatari」の研究 : 問答の研究 : その(二)
Sub Title	A study of the dialogue in the Feiqe no monogatari
Author	増田, 澄子(Masuda, Sumiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.9- 20
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「Feiqe no monogatari」の研究

―問答の研究―その（二）

増田澄子

一　序

―問答の研究―その（一）[1]では、『天草本平家物語』の編者、はびあんが入教以前に禅僧であり、編纂時には天草学林で日本語教師として責任者の立場にあった事を考察し、更に物語成立までの内部事情などに触れた後、物語を除いた問答の部分には禅生活の影響が反映している事などを述べた。

問答の部分は右の傾向以外にも編者の特色が見出される箇所であると思われるが、ここでは基本的な構想・巻と巻との継続の問題などを考えていきたい。『天草本平家物語』の特に問答の部分について内容を検討する時に、それが物語と関連を持った諸点に及ぶ場合は、内容から本質的なものを見出す以外に決め手となる資料はないように思われる。物語そのものはかなり忠実に原拠本[2]を辿ったと推定し得る為、編者そのものの意向は出ていないと思われるが、問答の部分の特に右馬之允の言葉には前述した問題点に触れた表現を見

出し得ると思う。

以下の文章は右のような点に留意しながら、編者がどのように基本的な構想・巻と巻との継続を考えていたかなどを理解しようとしたものである。

二　構想までの諸問題

編者が『天草本平家物語』を編纂するに当って、構想を如何に考えていたかは編者自身の言葉としては見出せない。ただ「Docujuno fitoni taixite xosu」（読誦の人に対して書す）の文中には、編者の物語に対する態度とでも言い得る表現がみられ、これらの中に構想に触れた問題点を見出し得るように思う。これらの事共から推定すると、編者は平家物語へ深く「心」を寄せていたようであり、かなりはっきりした方針をもって編纂に臨んだようである。

まず「Docujuno fitoni taixite xosu」は『天草本平家物語』の緒言で、ここには本を編纂するに至った由来・平家物語を選んだ理由・師が示した編纂の方針・編者の原拠本への態度などが書かれている。これによると師の編纂の狙いは、

Sareba varera cono cunini qitatte, tenno minoriuo tocanto suruniua, *como cunino fŭzocu uo xiri, mata cotobauo tassubeqi coto mofpara nari.* Carugayuyeni cono riōgiōno tasuqeto narubeqi Jichiqino xouo vaga cunino monjini vtçuxi, xini chiriba métosu : nági sono xouo yerande coreuo ameto :

にみられるように、外人宣教師達が日本の風俗を知り言葉に深く通じる為の助けとしたかったことにあったのがわかる。

こうした師の要請に対して、編者は自分の才が短い故に力の及ぶところではないと謙遜しながらもその意を受け、更に平家物語を選んだ理由を、

Xicareba cotobauo manabigaterani *Jichiqino vŏjuno tomurŏbeqi xo core vouoxitoiyedomo,* nacanzzucu Yeizánojŭrio, monsaini

natacaqi *Guenye fôinno xeisacu Feiqemonogatarini xiquna arajito vomoi*.....

にあるように、両条の助けとなるのは多くの書の中で平家物語に匹敵するものはないという強い意向が伺われる。このような意向は「Jichijqiino võjiuo tomurõbeqi xo core vouoxitoiyedomo」とあるように、日本の書への認識が裏付けとなって示されたものと思われるが、「nacanzzucu Yeizáno jürio, monsaini natacaqi Guenye fôinno xeisacu」というように、Guenye 法印への深い尊崇の念もその支えとなっていたのであろう。

師が示した具体的な編纂方針の一つは

㊀ ima cono feiqeuoba xomotno gotoqunixezu, *riinin aitaixiie zõtanuo nasuga gotoqu*, cotobano tenifauo xoja xeyotonari:

と、両人相対して雑談しているように言葉の豆爾波を書写せよということであり、二つめは、

㊁ conocunino fũzocu toxite, *ichininni amatano na, quanyno tonaye aru coto uomo saqubexito* nari:

と、この国の風俗として一人に多くの名・官位を避けよということであり、三つめは、

㊂ tattoqi von aruji *Iesu Christono Euangelhono minoriuo firomen tamenareba, cono xiguanno tayorito narazaru cotouo ba minamotte nozocazũba arubecarazu* tono gui nari.

と、志願の便りとならないものは「除かずんばあるべからず」ということである。この三つの方針を物語の構想という問題に関連づけて原拠本との関係を推定してみると、㊀は物語の筋は問答で展開していくような形態をとる事になり、㊁は文が部分的に簡素な表現に変ってくるし、㊂は漠然とした内容ではあるけれど、特に宗教[3]や皇室に関係ある内容・歴史・古例などの話を多数欠いている事などから、㊂の方針の内容は編者にとって編纂上の大きな問題点となった事は明白である。

右のように師が示した方針について、編者には幾分かの逡巡はあったようであるが、次の如くに原拠本への態度を述べている。

Yotte miguino xiguanno atedocoroni võji, *xi no meini xiagaite, azaqeriuo bamminno xiõni vqẽ cotouo cayerimizu, cono monogatariuo chicarano voyobutocoroua fonjonocotobauo tagayezu xoja xi nuqigaqi to naxitaru mono nari*;

のように、師の命に従い万民の嘲りを覚悟の上で、力の及ぶところは本書を違えず書写し抜書としたとあるのをみれば、師の編纂方針の意義を一一納得しながらも、原拠本を大切に考えているあたりかなりはっきりした編纂態度が現われていると言えよう。

以上のように『天草本平家物語』の構想は緒言を手がかりとして考えた場合に、編者には外人宣教師達の勉学の為の書としては平家物語がもっともよいという考えがあり、強い推薦の意向を抱いていた事がわかる。この意向は平家物語への認識が裏付となっていると考えられる性質のものであって、知的な内容に支えられていたとも言えるであろう。『天草本平家物語』と平家物語諸本とで前者を著しく特色あらしめる結果となったのは、師が編纂方針として示した雑談の形態をとる事・志願の便りにならないことは除く事などの二点を活かしたからであろうが、特に後者は物語の内容を大きく変容させる結果になった。一方、編者は師の方針を謙虚に受け入れながらも忠実に原拠本を辿ったようであり、これらの事共からはかなり意識的な構えで編纂に臨んだと推定できる。このような態度は、以下の章段で述べる基本的な構想・巻と巻との継続の問題などの点にも共通なものとしてみられる傾向であるが、ここではまず構想の前段階の問題として、基本となるべき事共を理解しようと努めた。

三　基本的な構想

前章では編者がどんな構想を抱いていたかを理解する為に、編纂当時の問題点を通じて構想におよぶ事共を考えてみたが、ここでは『天草本平家物語』の内容から構想に触れると思われる点について理解を進めていこう。

編者は『天草本平家物語』で、右馬之允と喜一検校との問答関係を利用した形式で物語を展開せしめているが、この中で物語を除いた両者のやりとりには、構想の中枢となる考え方が伺われるようである。まず編者は物語の内容をどのように纏めようとしていたかを考えてみると、物語の冒頭である「巻第一」・「第一」で、右馬之允は喜一検校に物語への要望とも言い得る言葉で語りかけている。

VManojô. Qéguêonobŏ, Feiqeno yuraiga qiqitaifodoni, ara ara riacu xite vocatari are.

これに応えて喜一検校は、

QIICHI. Yasui coto de gozaru : vôcata catari maraxôzu.

と、右馬之允の意を素直に受けている。この両者の対話のような問答を一読すると、右馬之允はさりげなく喜一検校に語り始めるのを促しているように思えるし、喜一検校はむしろ進んで右馬之允の意を迎えるかのように応じているように思えるが、実際にはこのやりとりの中に編者の構想についての中枢となる考え方が含まれているようである。つまり右馬之允は「平家の由来が聞きたい程にあらあら略してお語りあれ。」と言っており、「平家の由来」を「あら〳〵略して」編纂するのを狙いとしたと思われる事は、以下の二点からより確かなものとして理解できよう。

この理由の一つは、右に引用した喜一検校の「やすい事でござる。おほかた語りまらせうず」の言葉には、相手に安易にくみしたような態度を感じるが、これははっきりした方針がある場合には同様な手法で事が運ばれるということはありがちなことであり、そうするとこの言葉は前述した考え方を支えるような役割を果していると言える。つまり平家物語を「あら〳〵略して」語るという考えようによっては困難な要求に、気軽に「やすい事でござる」と応じ、その意を受けて「おほかた語りまらせうず」と答えているのは、まず最初に物語の構想を打ち出したとみてよいであろう。

二つめは「巻第四」・「第二十八」には、右馬之允と喜一検校との「あら〳〵略して」に対する確認の言葉がある。右馬之允は次の言葉で「第二十八」にはいる。

VM. Xite tairiacu Feiqemo asoco coco naredomo, vôcata qiqitouoitacato zonzuru.

これに応じて喜一検校の相槌とも言える答えに続いて「平家断絶」が語られていくが、この末尾で喜一検校は次のように語っている。

Feiqeno yuraiua tairiacu cono bunde gozarufodoni,……

と、長く語り続けた物語の締め括りをし、更に右馬之允へ謝意を表して『天草本平家物語』を完結に導いているが、「第二十八」にこれらの言葉があるのは構想についての考え方が始めと変っていない事を示すことになろう。つまり右馬之允の「平家の由来」を「あら

あら略してお語りあれ」という要望が、後になって再び彼自身で「大略平家もあそここなれども、大方聞き通いたかと存ずる」と認めた結果になっているのは、編者自身が目的を達したと考えているとしてよいであろうし、前述したように喜一検校も右馬之允の意を気軽に受け「おほかた語りまらせうず」と答え、すべてを語り終った後で「平家の由来は大略此の分でござるほどに……」と改めて跡づけている点など、両者がそれぞれ目的を達した事を確認し合っているような結果となっているのは、編者が構想として抱いていた根幹となっている考えを一貫させたという意識が現われていると受けとってよいであろう。

このように「巻第一」・「第一」の右馬之允の「平家の由来」を「あら〳〵略してお語りあれ」の要望とも言える問いと、これに応じた喜一検校の答えに意を用い、更に「巻第四」・「第二十八」において両者が共に語られ語った跡を「……大略……云々」の語調で認め合っているなどの前後関係を考え併せた時、編者が『天草本平家物語』の物語の部分を如何に纏めようと考えていたかという構想の一端を明らかにすることができたと思う。編者の「平家の由来」を「あら〳〵略して」編纂するという意図を繰り返し表現するという手法の中に、構想の中枢となる考えがより確かなものとして浮んでくる。「あら〳〵略して」とはどのような事かについては別の機会に譲るが、一応「読誦の人に対して書す」に示されている事共に拠っていると考えてよいようではあるけれども、前章と本章とでも触れているように、編者が編纂に当って示した態度には意識的な姿勢や明瞭な意向などが伺えるのであってみれば、これらの立場も問題点の解明の為の手がかりとなろう。

四　巻と巻との継続

編者が物語の構想を如何に考えていたかは、「平家の由来」を「あら〳〵略して」編纂する事にあって、編者はこの点をはっきり意図していたと考えてよいであろう。このような意図は「巻第一」を除く各巻「第一」の問答にもみられる傾向であるが、ここではそれらがどんな役割を果しているかを明らかにしていこう。各巻「第一」の両者の問答には、巻全体の内容に亘っては言い及んではいない

が、各巻「第一」で語られる話の一部分に物語の流れを継続させようとしたような意向は含んでいるようである。前者はその他の例にも共通している為、問題の焦点とはしないが、後者には前巻末と次巻「第一」とを編者が意識的に継続せしめようとしたかと思われる表現がみられるなどを考えていくと、特に大きな問題点である祇王の位置の説明も不可能ではないようである。

「巻第一」・「第一」は前述したように、右馬之允が物語を聞きたいという要望に喜一検校が応じて物語を始めている。

VManojô. Qégueônobŏ, Feiqeno yurai ga qiqitai fodoni, ara ara riacu xite vocatari are.

QIICHI. Yasui coto de gozaru: vôcata catari marazôzu. Mazzu Feiqemonogatari no caqifajime niua.....

とあって、次に祇園精舎の極めて簡略化したような話が続く。この両者のやりとりには、平家物語全体を如何に語るかという事を述べてはあっても、「巻第一」の為の言葉はない。物語を最初から語るのには物語を起す言葉があればよいとも言えるのであって、「第一」の物語の内容を指定しているような又は予定しているような右馬之允の言葉はこの場合には必ずしも必要ではないとも言えるが、それならばここでの右馬之允の言葉は間接的に「第一」に触れたものとして受けざるを得ないであろう。

「巻第一」は「第一」～「第十二」までの話から成り立っているが、「第一」には右馬之允の物語を問う言葉が屢々出ており雑談の色彩が濃い。「第二」～「第十二」までにはこういう設定はなく、内題の後にくる右馬之允のただ一回の問いに答えて喜一検校は内題の内容を語っていく。従って「第一」では物語内部の問いが実際には物語を展開させる役割を果しているが、「第二」以下では最初の問いのみがその役割を果している。このような形態で「巻第一」は盛者必衰の道理から有王が俊寛の後世を弔った事までの話が纏められている。

次に「巻第二」・「第一」について考えてみよう。「第一」は祇王の話であるが、「第二」は高倉宮の御謀叛の話へ移っている。まず「第一」話を起す為の問答は、

VM. Sate macotoni tare nimo, care nimo Qiyomori ua nangui uo caqeta fito gia no? Matasono Guiuô ga coto uomo qiqitai, vocatariare.

QI. Nagai coto naredomo, mōsōzu. Qiyomori ua cono yōni……

と、清盛の横暴を説き更に祇王の話へ進んでいく。ここで問題となるのは祇王の位置であって、有王から高倉宮の御謀叛までの間に祇王がある例は他の諸本には見出せない。この両者のやりとりには話のゆきがかり上応じたような言葉とか、ここで聞きたい話の希望とかは述べてあっても、「巻第二」の内容に触れてはいないのは「巻第一」の場合と同じである。右の問答で特に重要な事は右馬之允の問いであって、編者が前話を意識している点が伺われる。即ち「さてまことに誰にも彼にも清盛は難儀をかけた人ぢやの？」を考えてみると、「さて」の接続詞で始まるこの文には、前に述べた事を受けた為の意が明らかに出ているし、「誰にも彼にも清盛は難儀をかけた人ぢやの？」とは、前巻で清盛に謀叛を企てた為にひどいめにあった成親卿関係の人々を指す事は、これら一連の物語の後にきている問答であってみれば容易に納得できよう。右馬之允は更に「また其の祇王が事をも聞きたい。お語りあれ。」と言っている。この要望は「また」の語に続いていることから、祇王の話をどのように前からの関連の上に聞きたかったかの点も明白にできると思われる。これは「誰にも彼にも清盛は難儀をかけた人ぢやの？」の系列の上に祇王をも意識していたのではあるまいか。つまり編者は右馬之允をして清盛が「誰にも彼にも」「難儀をかけた……」のは、成親卿関係の人々のみでなく白拍子祇王をもこのような認識の範囲に留めさせたのではなかろうか。最後に右馬之允は「……お語りあれ。」とはっきりした語調で言葉を結んでいるが、これには祇王の位置づけを明確なものにしようとした意向が出ているように思う。次に喜一検校の答えを考えてみると、右馬之允の言葉に対して、「長い事なれども申さうず。清盛はこのやうに……」と清盛の威勢に続いて祇王を語っていくが、「長い事なれども申さうず。……」にはやや躊躇がみられる。これは勿論話量[4]の多さを言うのであろうが、このような問題を控えながらも祇王を位置づけたのは、平家物語中の有名な話の一つであったという事情が含まれているのであろう。祇王の特殊な位置づけは、前述したような編者の意図によるものと思われるが、右のような事情が背景となっているのであろう。物語の流れとしては前巻[5]の「第十二」から本巻の「第二」へ移行していくのが自然というべきであろうが、「第十二[6]」から「第一」へ続くのがむしろ自然のように思わしめる箇所がある。そこを通じて編者の意図をもう一度確かめてみると、前巻「第十二」の末尾に有王が諸国修行をして主の後世を弔った話に続いて、

Conoyŏnifto no vomoi nagueqi no tçumoru Feiqeno suye ua nanto arŏca vo soroxij coto gia.

とあるが、この文の「人」は前からの話を受けた複数を意味する語であってみれば、前述した聞き手の右馬之允の言葉はこうした内容を巧みに受けとめていたように思われる。

「巻第二」は「第一」～「第十二」までであるが、「第一」の右馬之允が祇王の物語を問う言葉には、祇王の話を位置づけるような意図が見出せるように思われる。『天草本平家物語』の祇王の位置は、他の平家物語諸本の祇王のそれとは関連を見出し難いと思われるが、右馬之允の言葉の内容を推定していくと、「巻第一」の物語にあった事共が念頭にあったようで、祇王の位置づけは編者なりに意味をもっていたものであったに違いない。前述したように「巻第二」・「第一」での右馬之允は、前巻の内容を受けるような事と祇王の話を聞きたいとは言っていても、「巻第二」全体には言い及んではいない。この巻には「巻第一」・「第一」のような雑談の色彩の強さはなく、殆んど同「第二」以下の形態をとっており、祇王が清盛に愛せられた事から平家が近江の源氏を攻めに発向した話までが纏められている。

「巻第三」に移ろう。この巻の「第一」と前巻末との間には平家物語の諸本にある話がかなりない事は、「巻第一」末と「巻第二」の場合と同様であるが、祇王のような特殊な位置づけを思わしめる話はない。「巻第三」・「第一」の両者の問答は、

VM. Yúbe no monogatariga amari foynai fodoni, ima ua mata Qisodono no naritachi, sono mufon no yŏ uomo vocatariare.

QI. Sate sate fatexi monai coto uo vôxeraruru : saraba mata catari maraxô.

VM. Sono Qisodono ua nanto yŏni mufon uo voco sarete atta zo? sonoyurai uomo coconi tçuzzuqete vocatariare.

QI. Mazzu sono Qisodono ua……

と、木曽の由来が語られていく。この二回にわたる両者のやりとりに、右馬之允は木曽の話を聞こうとしてはいるものの、最初の表現には前からの関連がそれとなく出ているように思われる。つまり「ゆうべの物語があまり本意ないほどに、今はまた木曽殿の成立ち……」とは、ゆうべの物語の続きとして今日の物語を聞こうということになると思う。まず「巻第二」・「第六」に戻ってみるとそこで両

者は「右馬。宇治川を渡いた事と源三位入道の討死を召された所をもきゝたい。喜。それをば明日と存ずれども、さらば只今申さうず。」と問答しあっている。「第七」では両者の問答はなく、内題に次いでいきなり物語となっているのは、聞き続けたい意向の強さが出ているようにも受けとれる。「第八」・「第九」・「第十」の問答には「第六」と特に関係ある内容は見出せないように思うが、「第八」・「第九」の話量は少ない部類に属す事や「第十」で物語のさきを急がせるような右馬之允の言葉などを考え併せた時、「巻第三」・「第一」の「ゆうべ……云々」は「巻第二」・「第六」の喜一検校の「それをば明日と存ずれども……云々」の言葉と無関係とは言い切れないようである。右馬之允は再び言葉を補って「巻第三」・「第一」で聞きたい事を問い、喜一検校はこれに応えて語り出す。

「巻第三」は「第一」～「第十三」までであるが、「第一」の右馬之允の言葉には前巻と関係があると思われる点があるのは、「巻第二」末から「巻第三」へ物語を進めたい意識が編者にあった事を物語るのではあるまいか。尚、この巻でも「第一」の問いで巻全体に触れる内容はなく、右馬之允の物語を問う言葉で物語は起される。このようにして木曽義仲の生い立ちから悪行を世上で取沙汰される話までが綴られている。

「巻第四」は各巻を通じて最も多くの内題と話量を抱えている。「第一」の右馬之允の問いには明らかに前話の内容を指示する語がある。両者の問答を引用してみると、

VManojô. Yoritomoua Qisoga conoyôna rôjeqi uo qijte xizzumeôtomo xerarenandaca?

に、頼朝が弟の範頼・義経をさし向けた話へと続いていくが、この問いには「第一」話が語られていく為に必要な言葉の中に、前話の内容が念頭にある為の語が見出せると思う。それは「頼朝は木曽がこのやうな狼籍をきいて……云々」とある「……このような……」という語は、「巻第三」・「第十三」にある狼籍の数々を示すものに他ならない。「巻第三」・「第十三」から「巻第四」・「第一」への移行については、「巻第一」末から「巻第二」・「巻第二」末から「巻第三」への場合のように話を欠いてはおらず、原拠本に従って物語を進めたようである。尚、今までの各巻「第一」の右馬之允は喜一検校が話す内容を指定したような問い方をしているが、ここのみが疑問の助詞を用いた、つまり話す内容を予定したような問い方である。(7)この巻の問いには単に先を促す為のものと思われる言葉もかなりあ

るなどは特徴ある傾向と言えよう。

「巻第四」は「第一」～「第二十八」までで物語は終りとなる。ここの「第一」の右馬之允の問いには前話の木曽の狼籍を指示する語がある。この事は編者が「巻第三」の末と「巻第四」の「第一」とを物語の筋として継続しようとした意図がはっきり出ている箇所と言えよう。「第一」の問いにも「巻第四」全体に亘る事に触れていないのは、各巻の「第一」の場合と同様である。この巻も殆ど右馬之允の言葉によって物語は語り継がれ、頼朝が範頼・義経をさし上せられた事から六代も失われたまでの長い話が綴られている。

以上「巻第一」～「巻第四」までの各「第一」の右馬之允と喜一検校の問答の主に右馬之允の言葉の中に、構成について編者の意図が如何に現われているかを探ろうと努めてきた。その結果は次巻への続かせ方については編者なりの考えがあったようで、各「第一」には意識的に配された跡が伺われる。この顕著な例は「巻第四」のそれであって、指示語と前話の内容との関係は明瞭であり、物語の続き工合にも無理はないが、「巻第三」では「巻第二」と関連があると思わしめるような表現が採られているのに留るが、平家諸本にある物語を大きく欠いている点をも考え併せると、右馬之允をしてこのような表現をとらしめた編者の意図には、前話との断層を埋めようとするものがあったと解釈しても無理ではないようである。更に大きな問題点を抱える「巻第一」と「巻第二」との関連を考えてみると、「巻第二」・「第一」が祇王の話となっているのは、右馬之允の言葉から推定していくと、「誰にも彼にも」「難儀」をかけた人達の系列に祇王をも加えていたのではないかと思われるが、特に「巻第四」の場合のように「第一」を前巻に継続して考えている事が明白な例として挙げ得る事、物語の構想についても明確な狙いを示している事などや、更に「読誦の人に対して書す」からは編纂に際しての意識的な構えや意向なども伺えるし、簡潔[8]に事を運んでいる手際の跡などを他の例からも考え併せると、先に述べたような推定は無理ではないと思われる。つまり編者は巻と巻との繋ぎにも意を用いていたと考えてよいと思われる。

五　結び

以上『天草本平家物語』の構想に関する問題点・巻と巻との継続などを編者が如何に考えていたかを跡づけようと試みた。編者は編纂に当ってかなりはっきりした方針や意向を抱いていたようであって、このような事共は物語を除いた問答の部分にかなり具体的に伺えるが、これらの中から前述した二点を纏めた結果、構想については「平家の由来」を「あら〳〵略して」編纂するという事が中枢となる考え方であり、「あら〳〵略して」綴りながらも前巻と次巻との続き工合が不自然ではないように意を用いたような跡がみられる。

注

1 『藝文研究』第二十号に掲載。

2 『国文学攻』の「天草版平家物語の原拠覚書」(清良瀬一氏著)などを参考にして校合した。

3 内題の一文章に相当する長さのものとしては宗教・皇室関係のものを欠いているのが目立ち、部分的なものとしては宗教・歴史古例などの内容を欠いているのが目立つ。

4 内題のもとに纏められた話量としては物語の中でもっとも多い。全体を通じた話量の平均は「祇王」の約半分程度である。

5 宗教関係・皇室関係・その他などの話を連続して欠いている。

6 「巻第一」・「第十二」と「巻第二」・「第一」との続き工合は問答で説明がつくと思うが、「巻第二」・「第一」と同「第二」の継続関係は問答で解決するのはむずかしい。

7 「巻第四」では部分的に話を欠いてはいるが物語の筋はかなり忠実に辿られているようである。

8 はびあんの著書『妙貞問答』・『破提宇子』・「仏法の次第略抜書」をも参照。